

詩編 3:6 には「身を横たえて眠り わたしはまた、目覚めます。」とあり、「朝の歌」と呼ばれています。4:5 では、「おののいて罪を離れよ。横たわるときも自らの心と語り、そして沈黙に入れ」とあり、9 節で「平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、」とあるので夕べの歌、夜の詩編であると言われます。3 編と 4 編が並んで編集されたと考えられ、夜、1 日を省みて、自己中心的生き方を悔い改め、主の支えに感謝し、問題を主なる神に委ねて眠りにつきます。今朝は、「広がり」について黙想します。人はしばしば長いトンネルに入り、出口が暗中模索します。ああ、出口が見えたと思っても、広い野原にいる、或いは林の中から遠い街がみえると想像するのも良いでしょう。では、4 編を読んでみましょう。ゆっくり読んでも 1 分 30 秒です。

2 節後半には、「苦難から解き放って下さい。憐れんで、祈りを聞いて下さい」(新共同訳)とありますが、ヘブライ語は、「あなたはわたしが悩んでいた時、わたしをくつろがせてくださいました」と口語訳のように翻訳することも可能です。アルター・ヴァイザーは、「苦しむとき、わたしにゆとりを与え、わたしをあわれみ、わたしの祈りを聞かれた」と翻訳。「解き放つ」「くつろがせる」「ゆとり」と翻訳された「ラーハブ」とは「広がりを与える」「余地をつくる」という意味です。詩編 25:17 では「悩む心を解き放ち、痛みからわたしを引き出して下さい」、詩編 119:32 は「あなたによって心は広くされ、わたしは戒めに従う道を走ります」と歌われています。そもそもヘブライ語の「救い」を意味する「ヤーシャー」も「広くすること」を意味しています。私たちは、ともすると先が見えず、八方塞がりの中のように思い、「狭く」(この詩では「苦難」と翻訳されています)されてしまいます。しかし、祈りが主なる神に聴かれていることを思うとき(2, 3 節)、心は広くされ、一息つけます。あるいは、最初の呼びかけの言葉も呼びかけではなく、1 節すべてをすでに経験した事柄として考えることも可能です。「わたしが叫んだとき、わが義なる神はわたしの叫びを聞かれた！」

「私の正しさ(義)を認めてくださる神よ」。信仰者は自分の義しさを自分自身ではなく、神に置きます。彼を訴える者、彼の名誉を傷つける者との間を神ご自身が審いて下さり、神がこの信仰者の義を維持して下さり、擁護して下さるといいます。自分以外の処に、自分を越えたお方に信頼する者は幸いです

5-6 節は自分自身に言い聞かせているのか、彼/彼女を辱める人に向かって言っているのか判断するのは難しい。口語訳では信仰者仲間たちに勧めていると言えるし、新共同訳では、詩人をあなどる者への呼びかけでしょうか。「ラガズ」というヘブライ語は、「動く」「ふるえる」ということが基本の意味で、第一に「怒る」、第二に、「恐れ慄く」という意味です。自分に向けたものであれば、あなどる者に向かって「怒っても良い。怒ることは人間の尊厳を守る大切な感情である」ということでしょうか。しかし、怒りは危険なことでもあり、どこか、自分を神の位置に祀り上げ、怒りに任せて行動すると、正しい判断・行動を損なわせ、人を傷つけます。夜の静けさの中で、神に向かって語り、反省し、神の判断に委ねることが大切です。他方、これを傷つける相手に対する言葉と考えると、「人を侮辱する者よ、自分のことを考えてみよ。あなたこそ、おののいて罪を離れよ。横たわるときに自らの心と語れば、自分を棚に上げて人をどうこう言うことはできず、沈黙せざるをえないよ」という意味になるでしょう。最後は、神に信頼する喜びを歌いあげで、「平和」(シャーローム)で終わります。おやすみなさい! あるいは、行ってらっしゃい! あるいは、新しい一日をシャーロームで始めよう。狭くなったらダメですよ。